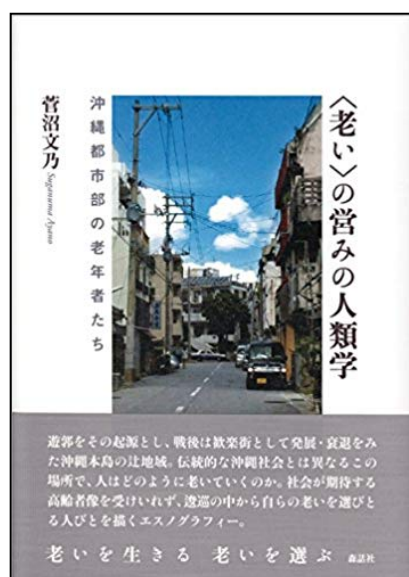


菅沼文乃著『〈老い〉の営みの人類学——沖縄都市部の老年者たち』、東京、森話社、2017年、239頁、6200円＋税。

吉田 佳世

1. 老年者の失墜という大きな物語

これまで文化人類学（以下、人類学と表記する）において老年者は非常に重要な存在であり続けてきた。なぜなら、多くの場合、老年者は人類学者に研究対象とする社会について知識を授けてくれる存在だからである。このように人類学的な営みのなかで立ち現れる老年者とは、知識を持ち、それゆえに尊敬され、権威をもつ存在であった。しかし、そこでは年を取ることのもう一つの側面が見過ごされていたといえるだろう。それは〈老いる〉ということがポジティブな側面だけではない、身体能力の低下や社会からの離脱といったネガティブな側面をもつ営みでもあるということである。長寿化するなかで老衰というプロセスが不可避となりつつある現代社会において、こうした〈老



い〉のネガティブな側面はますます前景化してきている。そこでは伝統的にあった老年者の地位は失墜したといえるだろう。今回書評を行う菅沼文乃著『〈老い〉の営みの人類学——沖縄都市部の老年者たち』も、現代社会のなかで〈老い〉がネガティブなものとして捉えられるようになったことをふまえ、そのなかで個々の老年者がいかに日々の暮らしを営んでいるのかについて描き出そうとしたものである。

人類学において〈老い〉とその当事者である老年者に関する研究が本格化したのは、青柳まちこの編著による『老いの人類学』（2004年刊行）に代表されるように、2000年前後のことである。その後、〈老い〉に関する研究は若手研究者の間でも行われ、その成果が近年相次いで刊行されている（高橋 2013；後藤 2017）。この背景には、日本社会が高齢化社会に突入し、〈老いが〉解決すべき“社会問題”として取り扱われるようになったということが背景にあるのはいうまでもない。

本書もこうした老年者研究の流れをくむものであるが、本書の特徴的な点は以下の2点に集約される。第一に、近年の研究がナーシングホームや老年者コミュニティといった、ある意味、老年者として囲い込まれた人々を対象とするのに対し、本書はそうした老年者

コミュニティを扱ってはいるものの、そこに完全に包摂しえない老年者あるいはそこから排除されている老年者たちに光を当てていることである。そして第二に、本書の舞台となる沖縄県那覇市・辻の特殊な地域性を重視し、特に地域祭祀に関する民族誌的記述に多く紙幅を割いているということである。それゆえに本書は、先行研究の批判的検討を含んだ沖縄の村落祭祀に関する民族誌としても読むことができる。本書評ではこうした特徴をふまえ、老いの人類学的研究として本書を評しつつも、これまでの沖縄を対象とする人類学・民俗的研究の流れからみて、本書がどのような位置づけをもつのかについても論じることにはしたい。

2. 本書の概要

本書は七章構成である。以下に各章を要約していくことにする。

「第一章 序論」は、人類学・社会学における老年者研究を概観した上で、本書の目的を明らかにしている箇所である。本書は「現象としての老化が自覚され、自分のもととして取り込まれる過程、すなわち『老いる過程』における老年者個人に焦点を当てる」とあるように (p. 8)、個々の老年者が自らの〈老い〉にいかに向き合い、生活を営んでいるのかという個別的なプロセスに注目することを目的としている。なぜ、こうした問題に着手するのかといえば、近年の研究の多くが、既に形成された老年者コミュニティを研究対象として選定することによって、老年者の存在を実在的に捉えてしまっているのではないかという問題意識があるからである (pp. 17-18)。より平易ないい方をすれば、行政が定めた定義である 65 歳という年齢を迎えたからといって、人々はすぐさま自らを老いた存在として自認する訳ではない。それにもかかわらず、はじめから老年者として囲い込まれた人々を研究対象としてしまえば、当事者である人々が老年者という役割を「積極的に形成、定義づけなおしている」(ギデンズ 2009: 205) という再帰的なプロセスを不問にしてしまうだけでなく、今日、老年者というカテゴリそのものが行政やメディア、企業、そして当事者を含むさまざまな人々の実践の影響をうけつつ複雑に構成・再構成されていることを見過ごすことにつながるからである。

「第二章 沖縄の老い」は、これまでの人類学・民俗学的研究を主な資料とし、沖縄における民俗的な老年者の位置づけを明らかにしている。沖縄において老年者は親族組織や村落共同体において一定の役割をもつ尊ばれた存在であり、何よりも各種祭祀において卓越した存在として位置づけられてきたという。本書ではこうした伝統社会での年の取り方を「沖縄的な老い」と表現している。その上で章の後半では、日本社会における近代福祉制度の成立と展開が整理され、老年者たちが福祉を受ける「社会的弱者」として認識されるようになったことが示されている (p. 52)。つまり、第二章では社会変化のなかで老年者たちが「沖縄的な老い」を全うすることができなくなったということが示されているのである。

「第三章 辻という地域」は、本書の舞台となる辻の17世紀頃から日本復帰頃までの歴史を明らかにした章である。ここで示される辻の特徴は以下2点である。第一点目は、辻が戦前までは公的遊郭として、戦後は米軍の都市計画によって歓楽街として整備されたという点である。第二点目は、遊郭から歓楽街へというように表面的には連続性をもつように捉えられるものの、実は、それを構成する人々が戦前・戦後では全く異なっているということである。戦前はいわゆる遊女(ジュリ)として働いていた人々によって構成されていたが、戦後から日本復帰までの歓楽街を支えたのは、遊郭時代とは縁もゆかりもない、出稼ぎのために宮古島などから来た他地域出身者たちであったという。本書は、この人々の転換を「断絶」という強い言葉で表現している(p. 83)。こうした表現には、同地域が人類学者・民俗学者がこれまで研究対象としてきた血縁と地縁に基づく人々によって構成された村落とは全く異なることを示すという意図もあると考えられる。

「第四章 辻の現代的様相」は、ひき続き辻について書かれている箇所である。現在、辻はいわゆる風俗店や米軍統治時代にAサインの認可を受けていたことを売りにする飲食店はあるものの、往時の勢いはない閑散とした街となっている。戦後まもなく建設されたコンクリート製のビルや住宅は老朽化のために家賃の安い住宅として貸し出され、2010年以降は観光客向けのマンスリーマンションやドミトリー建設が進んでいる。そのため、戦後の辻を支えた出稼ぎ者の子・孫世代の多くは地域の外へと移動し、その結果、住民の3分の1以上が高齢者という那覇市内でも際立って高い高齢化率となっているのである。

この章の最も注目すべきところは、辻ならびに隣接地区である若狭を単位とする「地域祭祀」、そして各家庭の祖先祭祀というように、今日の祭祀のあり方について多く紙幅が割かれていることだろう。辻の場合、同地域の最も大きな祭祀であるハチカショウガツを担っている女性司祭(カミンチュ)や運営組織の人々は、必ずしも辻に住んでいる訳ではなく、遊郭時代に何かしらの縁(=「根」)をもつ人々であるという。つまり、マジョリティである戦後の出稼ぎ者やその子孫は、ハチカショウガツにほとんど関わりをもっていないのである。他方、辻と同じく出稼ぎ者とその子孫をマジョリティとする若狭も、かれらによって地域祭祀が執り行われているとはいい難く、いわゆる信仰心の強い特定の老年女性たちが任意で参加している状態であるという。

ここでの筆者の主張は明確である。それは、両地域が、土地とそこに暮らす人々の一体性が祭祀を通じて観念的に正当化されるような、これまで人類学が想定してきた有機的連関をもつ伝統的村落ではないということである。村落祭祀という語が避けられ、地域祭祀という人類学・民俗学ではあまり馴染みのない語が用いられているのもそのためであろう。本書はこうした祭祀の非一体性を指摘することによって、辻に暮らす老年者たちが、祭祀において卓越した役割をもつという伝統的な老年者の役割を容易に獲得しえない現実があることを暗示していると考えられる。

「第五章 社会福祉と老い」は、辻に暮らす老年者たちが実際にどのような暮らしを営んでいるのか、高齢者福祉施設「辻老人憩いの家」が実施している社会参加型の福祉サービスとの関わりから分析した箇所である。章の前半では、社会参加型の福祉サービス成立の経緯の分析が行われ、こうした福祉サービスの展開を通じて、行政が、高齢者に対し自主的に社会に参加し社会関係を構築していくような、「主体性」をもつことを期待・要請す

るようになったことが指摘されている。行政の理念からすれば「辻老人憩いの家」を利用する人々は、そうした行政の呼びかけに応えた人として捉えることもできる。しかし、本章では利用者たちの内実が実にさまざまであることが示されている。例えば、同施設に集う老年者の一定数は、講師や民生委員、グループの指導者といった運営的な役割に回っているという、また、利用者の多くは辻のマジョリティである戦後に移り住んだ他地域出身者であるため、福祉参加以前から既に形成されている社会関係を継続するためにサービスが利用されているという。こうした利用のあり方は行政の思惑とは異なるものの、主体的な社会参加という意味では必ずしも大きく外れるものではない。しかし、地域的特性が考慮されぬまま、年齢のみを基準として対象者を選定する福祉サービスのあり方には、多くの問題があることが明らかとなってくる。事実、既に形成されている社会関係の維持に同施設が利用されているという特徴は、社会関係をもたない老年者の新規参加を困難にするという状況を生み出しているのである。それは後の第六章への関心へとつながっていく。

そして、本書のなかでも最もセンセーショナルな箇所、「第六章 独居老年者と老い」である。第五章を読んだ読者の多くは、福祉サービスを利用しない老年者とはどのような背景をもつ人々なのかと思うだろう。本章はその疑問に答えるものとなっている。ここで菅沼が注目しているのは、老後を迎えてから単身で辻に移り住んだ独居者たちである。かれらは何らかの事情で出身地を離れ、身寄りがないか、子や親族への遠慮から、独居を選択した老年者たちである。注目すべきは、独居といってもその居住形態が一様ではないということである。アパートなどを借り単身で暮らす老年者もいれば、いわゆるカプセルホテルのような月間契約型の格安宿泊施設に暮らす老年者もいるのである。本章では聞き取り調査や参与観察調査の成果から、かれらの暮らしの実態が明らかにされている。いずれの居住形態においても老年者たちは、第五章で取り上げたような行政が提供する社会参加型の福祉サービスには否定的、消極的である。その背景には、高齢者とみなされることへの忌避意識や、第五章で指摘したように、サービスの利用者の関係が既に強固であるため、新規に参加しにくいという状況がある。しかし、かれらが全く社会関係から切り離された孤独な存在かといえば、そうではない。アパートなどに住む老年者たちは地域内の社会関係に新規に参入しており、自らのもつ知識を資源として同じ独居老年者の世話役やカミンチュなど一定の社会的役割を獲得している様子が見受けられる。他方、カプセルホテルで独居する老年者たちも、同じカプセルホテルに入居する若年世代と社会関係を構築していく姿をみることができる。しかし、後者のカプセルホテルでのつながりはあくまで短期的なものであり、なおかつ若年世代からの働きかけを待つという非常に受け身的なものであるという。本書では同じ独居老年者でも居住形態によってこのような差異が生じる要因として、契約者以外の人々の立ち入りができないなどの格安宿泊施設がもつ施設上の制約を挙げている。この点については後で再検討することにした。

そして「第七章 結論」では、全章をふまえた上での総括が行われている。

以上が本書の概要であるが、大まかにいえば、本書は序論と結論を除いて二部構成として捉えることができる。第一部は第二章・第三章・第四章である。ここでは辻が、老年者たちにとって「沖縄的な老い」を全うすることが容易ではない地域であることが強調されている。その理由として筆者が挙げているのは、日本社会における近代福祉制度の導入と、

辻がもつ地域の特異性である。第一部は多くの紙幅が割かれており、私が本書を沖縄の村落祭祀についての民俗誌としても読むことができると述べたのはそれ故である。そして第二部は第五章・第六章である。行政が提供する社会参加型福祉サービスを利用する老年者と利用しない老年者双方について論じることで、老年者の地位が失墜するなかで、各自が主体的に社会参加を行うよう期待されるようになった今日の状況に対する、老年者たちの対応のあり方を明らかにしているといえる。

3. “寄る辺のない人々” へのまなざし

では、本書について私なりの意見を以下に述べていきたい。

まず、老年者たちが〈老い〉に対していかに向き合っているのかという本書の問題設定は、読者に非常に馴染みやすいものではないだろうか。「年を取りたくない」と感じている人々は多い。それは私たちが〈老い〉をネガティブなものとして捉えていることの反証でもある。老年者の失墜という「大きな物語」は老年者だけでなく、本書を読む私たちにも共有されたものである。付言すれば、菅沼は就職氷河期に辛酸をなめたロス・ジェネレーションと呼ばれる世代である。この世代は、他の世代に比してお金や家族を持たない人の割合の高い世代であるといわれている。お金や家族を持たない寄る辺のない老年者はいかに生きているのかという疑問は、翻ってこの世代が抱える将来の不安の投影でもある。そのため本書は学術書であるとともに、一般の人々に対してもそうした疑問の答えのひとつを提示してくれるものとなっている。その答えのひとつは、なんといっても、そうした老年者たちがカプセルホテルのような月間契約型の格安宿泊施設に流れつくように住んでいるという実態を克明に記したことだろう。このような“寄る辺のない人々”の存在に光を当てていることは、本書の最大の魅力といえる。

また、“寄る辺のなさ”への関心は本書を通底する志向であるように私には感じられる。先にも述べたが、私が第一部と称した第二章・第三章・第四章では、辻の歴史が克明に描かれている。具体的には、戦前の遊郭の歴史、戦後に歓楽街として再編成された歴史、そして現在が、祭祀の変化を軸としながら詳細に描かれているのだが、そこでは導かれる結論はいつもひとつである。それは、辻は先行研究がこれまで扱ってきた血縁や地縁を基盤とする伝統的な村落共同体“ではない”という否定形の結論なのである。本書ではこの手法によって、辻のマジョリティである戦後に移住してきた出稼ぎ者であっても、完全には地域に埋め込まれることのない、寄る辺のなさを抱えた存在であることを描き出しているのである。

なお、こうした本書の先行研究に対する批判を含んだ村落共同体の捉え方は1990年代のポストコロニアリズム人類学とも関心が重なる点である。ポストコロニアリズムは沖縄研究という文脈では特に研究対象の選定という点から議論が重ねられた。つまり、先行研究がいわゆる本土化の荒廃のない伝統的村落を好んで研究対象に据えたことで沖縄を固定的に描いてきたこと、こうした研究者の選好によって現実の人々がもつ創造性を捨象して

きたのではないかという反省がなされたのである(例えば太田 1998)。その意味で本書は、単に老年者研究のために沖縄を選定しただけではない、これまでの沖縄研究の蓄積や問題点を十分ふまえた上で、沖縄に生きる老年者を描き出そうとした良書であるといえるだろう。

しかし、“寄る辺のなさ”を強調し、その主たる根拠を日本社会における近代福祉制度の成立と展開に求めるという本書のスタンスは、あまりにも老年者の失墜という「大きな物語」に追従しすぎてはいないだろうか。その結果、辻にある現実の複雑さ、そしてなによりも辻に無数にちらばる「小さな物語」をそぎ落としてしまっているのではないかという印象をもつ。そのことを示すために、いま一度、第六章のカプセルホテルのような月間契約型の格安宿泊施設に暮らす老年者に注目することにしたい。

第六章では、格安宿泊施設に暮らす老年者たちの生活が、施設内の間取り、一日の行動、他の入居者との交流などを通じて詳細に描かれている。興味深いことに、本書ではそうした生活に対するかれら自身の主観的な語りはほとんど書かれていないのである。例えば、同施設に住む 60 代後半男性 HI 氏が、持病の悪化の際に 40 代の男性入居者 TB 氏に病院に連れて行ってもらったことを回想するくだりでもそうである。こうした場面での話者の語りは、ややもすればここでの生活に対する肯定的な語りとしてすくい上げられがちだが、本書では「HI 氏はしみじみと感謝を語ったが、TB 氏は『おじい、気にするなって!』と肩をたたいた」(p. 195) というように、そこでは HI 氏が何を、いかに語ったかは書かれていないのである。あくまで私の感想であるが、こうした記述によって、ひどくものさびしい気持ちにさせられた瞬間もあったし、反対に「こういう老後もありかもしれない」という前向きな気持ちにさせられる瞬間もあった。なぜそのように感じたかといえば、ここでは、かれらは、“かわいそう”な存在として描かれている訳でも、かといって、“明るい”存在として描かれている訳でもなかったからである。つまり、こうした記述方法は、かれらの生活に対する安易な価値判断を避け、その解釈を読者に委ねる効果を生み出していると考えられる。

しかし、格安宿泊施設に住む老年者たちに対する解釈可能性に開かれたまなざしは、考察へと入った途端、独立的に居を構える独居老年者との比較によって、短期的で持続的でない社会関係という特徴が抽出され、ある意味、老年者の失墜という「大きな物語」のなかで生きる老年者像へと収斂してしまったように思われる。また、この結論自体もやや尚早である感は否めない。なぜなら、格安宿泊施設に住む老年者たちは菅沼がそこに滞在していたからこそ出会えた人々であり、他方、独立的に居を構える独居老年者は菅沼が調査のなかで関わった人々の紹介を通じて選定されているため、そもそもの前提条件が異なっていると考えられるからである (p. 22)。つまり、独立的に居を構えているが、交遊関係を一切持たないが故に出会えていない老年者がいるという可能性をここでは捨てきれない。

むしろ、私が深く掘り下げる必要があると考えるのは、格安宿泊施設という公的領域と私的領域が複雑に混在した場所で生まれている従来の地縁や血縁とは全く異なる縁の存在である。確かに偶発的で一時的ではあるが、共住という濃密な関係でもある。近年、長期的で恒常的なつながりが必ずしもセイフティ・ネットになるとは限らず、偶発的で一時的な弱いつながりが人に大きな影響をもつことが注目されていることを考えれば(例えば、

東 2014)、短期的であっても、見知らぬ若者たちと奇妙なつながりを編んでいることについて、より深い考察が可能となってくるのではないだろうか。そこでの若者と老年者の関係はいかなるものなのか、「沖縄的な老い」とはどのように異なるのかも気になるところである。

このように格安宿泊施設に住む老年者に限らず、本書のなかに登場する老年者たちは、社会変化のなかの老年者の失墜という「大きな物語」のなかに完全に呑みこまれているようには私には見えなかった。菅沼は老年者が「大きな物語」のなかを生きていることを強調したが、本書には「大きな物語」に収斂しえない、「小さな物語」が無数にちりばめられている。その「小さな物語」を拾い上げていくことが、実は行政の思惑からはずれるような新たな老年者の役割を形成し、定義づけなおしていく足がかりとなるのではないだろうか。

参考文献

青柳 まちこ

2004 『老いの人類学』、世界思想社。

東 浩紀

2014 『弱いつながり——検索ワードを探す旅』、幻冬舎。

太田 好信

1998 『トランスポジションの思想——文化人類学の再想像』、世界思想社。

ギデンズ、アンソニー

2009 『社会学(第五版)』、松尾精文ほか訳、而立書房。

高橋 絵里香

2013 『老いを歩む人びと——高齢者の日常からみた福祉国家フィンランドの民族誌』、勁草書房。

後藤 晴子

2017 『老いる経験の民族誌——南島で生きる〈トシヨリ〉の日常実践と物語』、九州大学出版会。